

地域のつながりとウェルビーイング

一言 英文

関西学院大学 文学部 総合心理科学科 准教授

“漁師とビジネスマン” (Heinrich Böll による寓話)

ある日、漁師が朝の漁を終えて浜辺で休んでいると、そこに旅行に来たビジネスマンが通りかかり、二人は話をしました。

ビジネスマン：「君はたったの数匹しか魚を捕まえていないじゃないか。もっとたくさんの魚を捕まえて、それを売るんだ。そうすれば、君のビジネスはどんどん拡大するだろう。」

漁師：「でも、私は今、釣りをして、家族と過ごし、楽しんでいるんです。これが私の生活です。」

ビジネスマン：「君はどうしてそんなに少ない魚で満足しているんだ？もっと捕まえれば、君はもっとお金を得て、従業員を雇って、さらにビジネスを拡大できる。そして、最終的には大きな成功を手に入れることができるんだ。」

漁師：「でも、その先に何がありますか？」

ビジネスマン：「成功したら、君は引退して、好きな時に好きな場所で贅沢な生活を楽しむことができるんだ。」

漁師：「でも、その先に何がありますか？」

ビジネスマン：「そりゃ君、毎日、釣りをして、家族と過ごして、楽しむんだよ。」

人の暮らし方は多様であり、めいめいの暮らし方の中で、人は一生懸命に生きようとしている。ウェルビーイングは人生の満足度等で測定

されるが、人の生き方が多様であるのと同じ程に、その具体的なあり方には多様性がある。著者が専門とする文化心理学という心理学の一領域では、人の心（例：幸福感）と、その人を取り巻く文化との相互に影響しあう過程を研究している。本章では、こうした筆者の観点から、地域のつながりとウェルビーイングについて考察してみたい。

1. 文化

文化とは、ある社会集団が、その歴史的な所産として築き上げ、伝えてきた、ものごとの意味、価値づけ、ルール等に見られる、その集団が総体として振る舞う様である。筆者の出身校である静岡県の某高校からは著名なサッカー選手が輩出されてきたが、このことで高校の体育の授業は毎回サッカーであったし、高校の前の売店には「サッカーボールもなか」という、ボールの形をした菓子が今日も売られている。サッカーの歴史がなければ、ここまでサッカーに興味を見出したり、この丸い菓子が価値づけられることもなかったであろう。そして、こうした町全体でのサッカーを基軸とした人々の振る舞い方は、卒業後20年以上経った現在でも、かの町に息づいており、きっとこれからも新たな選手を育てる土壌となるのであろう。こうしたことが文化である。

特集 ウェルビーイングを考える

人間が築く文化は、まったく唐突に立ち現れるものではない。もともと人が集まって社会集団ができた経緯に大きく関わる出来事、例えば「生業」の特徴等によって生まれたのではないかと考えられている。農業、とりわけ水田稲作を営む地域において、そこに暮らす人々は、他者から受ける自分自身の評価のことを心配したり (Uchida et al., 2019)、ものごとの現実的な関係性について考えやすい (Talhelm et al. 2014) といった心—知情意—の特徴を持つことが知られている。こうした心の特徴は、歴史的に水田稲作地域で、田植えや灌漑といった協力作業が不可欠であったために生まれ、受け継がれていると考えられている。というのは、皆でこうした大変な作業を行う場合、集団の一員として誰しも他者との関係性の中でしっかりと自分の役をこなし、一員として立ち回る必要にかられる。一人だけ手を抜くなどということがあれば、集団ではたちまち批判の対象となるだろう。そのために他者からの評価に敏感で、関係性についてすぐに考えられることが、個人としての生活を支える心理的な基盤となった。このような、社会集団としての暮らし方が、そこで暮らす個人に要求することの数々によって、私達個人の心は社会的に形成されると考えられる。そして、こうした心の過程は、さらなる世代の教育や人選等を通し、同様の心を育てる土壌となる。

2. 文化とウェルビーイング

このように考えると、人々の生き方や、幸福感といった心の問題も、文化という土壌からまったく切り離して考えることは難しいかもしれない。もちろん、現代を生きる私達は、全員が過去の人々が従事した生活を (例：農業を生業と) しているわけではない。しかし、社会集団の存続を歴史的に支えた出来事や事実は、そ

こに伝わった教育や人選、または、人々相互の人に対する心構えを通し、後代の人々にもそれに応じた考え方を広めるきっかけの一つとなり (Cohen et al., 1996)、心を文化的に形づくる。

Kitayama ら (2006) は、北米人学生、北海道生まれの日本人学生、本州出身の北海道で暮らし始めた日本人学生と、本州の日本人学生の4群を比較した。世界的にも個人主義文化 (個人の自由に価値を置く社会) の成員だとされる北米人学生に比べると、一般的な日本人学生は集団主義文化 (自分が所属する集団に忠誠心を持つことに価値を置く社会) の成員だとされる。このことで、本州の日本人学生と北米人学生とでは、「幸福感」に伴う感情 (例：落ち着くほど幸せだ、という場合、「落ち着く」気持ち) に違いがある。具体的には、後者ほど幸福感には「誇り」が伴い、それは、この感情が他者に対して自分の長所が明らかになった際に感じられるという特徴を持ち、それが個人に価値を置くような北米文化と整合性が高いためだとされている。ここで、この幸福感と「誇り」との関連の強さを統計的に比較すると、日本人3群の中で、北海道生まれの学生が最も北米人学生に近い結果となった。つまり、北海道は、未開拓地を拓いて農業を発展させたことで「道」として成立した地域であるが、そうした開拓者の独立心が育つ土壌が北海道には今を生きる学生にも伝わっていることが示唆される。

この研究結果は、幸福感の意味づけに、その地域の文化が反映された結果であるとも解釈できる。すなわち、北海道では「幸せ」が「誇り (他者に対して自分の長所が明らかになる気持ち)」に近い意味を持っている。著者の研究では、経済発展の著しいタイ王国の地域差に、このような幸福感の意味づけの違いがあることを見出している (Hitokoto et al., 2014)。具体的には、タイ王国では、農業による生業を営む地域の住民ほど、「私だけでなく、まわりの人も幸せだ」

等といった、自分と他者との調和を「幸せ」と捉えた「協調的幸福感」が高いことが分かった。お気づきのとおり、協調的幸福感とは、冒頭で紹介した漁師のように、身近な他者との調和、平穏で人並みであることを旨とした幸福感である。また、この特定の質問を行う前の段階で、「あなたはどの程度人生に満足しているか」と尋ね、その評価の理由を自由に回答させたデータからは、農業地域の住民ほど「家族が健康だから」や「普通の暮らしができてから」といった、調和や平穏さについて言及していたことが分かった。一方で、都市部では自らの所有物や身体の状態に着目したものが多く、これより、生活する地域の特徴—農業地域や都市—が、そこに暮らす人々の幸福感の含意を左右していることが示唆された。

3. 社会環境

こうした研究は、文化の歴史的な起源として、人の暮らしを下支えした基本的な社会環境があった可能性を示唆している。そして、そうした社会環境の違いが、いわゆる幸福感の文化差を歴史的に生じさせ、また、その歴史の上に今日暮らす人々の幸福感の性質を左右する要因ともなりうることも示していよう。社会環境には、上記の生業を始め、実に様々な自然環境や、人々が創り出した環境のあり方が含まれる。その違いは、国規模で異なるものもあるが（例：政治、教育）、より小さな社会の単位としての地域規模で異なるものも存在する。

社会関係資本（social capital）とは、地域の人々が互いに持つ信頼や相互扶助の規範であり、典型的には、住民間のつながりの強さや、「私は地域の人々を信頼している」「この地域には互いに助け合うルールがある」等といった質問に対する個人の賛成度を地域単位で平均したものである。また、これを持つ「地域」には町、

州や国といった異なる範囲の社会集団を想定することが可能だとされている。社会関係資本が高い地域では、人々が集合活動へ参加する可能性が高く、市民性や他者への信頼も高い。また、信頼が高い地域では、加齢によるものではない死亡率が低いことや、福祉助成金が高いことが示されている（Kawachi, 1999）。

岡山県内の地域差で社会関係資本を比較した研究によると、興味深いことに、地域の平均的な信頼や相互扶助の規範は、そこで暮らす高齢者の精神疾患の少なさと関係する（Kobayashi et al., 2015）。そして、これは、住民個人としてこうした規範を持つことの効果を超えて、地域の平均値が高いこと自体の効果が見られている。「トラブルが起きた時、頼れる誰かがいる」という質問に肯定的に回答できることは、国を超えて幸福感と比例関係にあることが知られているが（Oishi & Schimmack, 2010）、社会関係資本は、そうした「誰か」が居ること自体を支える社会環境の特徴であるとも考えられ、それゆえ私達の幸福感を支える文脈なのである。

4. 協調的幸福感と社会関係資本

支えてくれる誰かに強く依存する私達の幸福感とは、協調的幸福感であるのかもしれない。実際、社会関係資本は協調的幸福感と比例関係にあることが近年示唆されている。その例として Hommerich et al. (2022) は、札幌市内に居住する 1600 名強の住民を対象に、協調的幸福感を左右する人口統計的変数および心理的変数を調査した。この研究では、参加者の性別、婚姻状況、居住形態、雇用状態、世帯収入、主観的健康によって異なる分を統計的に抑えた上で、社会関係資本とそれに関する心理的変数の効果を検討した。同時に、この効果を、参加者個人が自分自身の人生にどれほど満足しているか、という、いわば主観的かつ個人が評価対象

特集 ウェルビーイングを考える

である幸福感とも言える「人生満足感」のそれと比較した。その結果、協調的幸福感は人生満足感に比べ、一般的信頼、互恵的規範および社会的ネットワークといった、いわゆる社会関係資本の指標群によって説明できることが明らかになった。人生満足感も一般的信頼や援助的な関係性からは説明されたものの、協調的幸福感は社会関係資本とのより包括的な結びつきが認められたという結果であった。

このことは、一口に幸福感といっても、その心理的な種類は細分化が可能であること、そして、後述するように地域でウェルビーイングを達成するという場合、その細分化したもののうちいずれを用いるかによって、個人の背景や生活のあり方、ひいては社会の特徴との間に見られる人々の幸福感との関係は異なる可能性があることを示唆している。

例えば Hitokoto & Takahashi (2021) は、南米の集団主義文化であるコスタリカと、欧州で個人主義文化のオランダと日本の3カ国で協調的幸福感と個人差変数との関連を検討した。社会人を対象としたこの調査では、特に年齢と協調的幸福感との関連に文化差があることを仮説としていた。具体的に、複数世代の家族的関わりが重視される集団主義文化では、加齢に伴って敬意に基づく他者からの援助など良性の加齢プロセス (Karasawa et al., 2011) があるかもしれないため、他者から受ける援助の経験が加齢に伴って協調的幸福感を増大させる可能性を検討した。調査の結果、コスタリカや日本では年齢と協調的幸福感に正の相関（加齢に伴って協調的幸福感が高いという傾向）が見られたのに対し、オランダではこれが無関連であった。

上記の研究では、あくまで年齢と協調的幸福感との相関関係がデータとなっており、実際に想定したように他者から援助されているという認識が協調的幸福感を高めているという直接的な証拠は得られていなかった。この点を補うた

め Hitokoto & Uchida (2025) は、日本人大学生を対象に、自らが持つ社会的な資源を想起させる前後で協調的幸福感が増加するのか、同じ個人から2時点のデータを収集して検討した。具体的には、自分にとって親しい友人を想起させた上で、その友人と楽しい経験をしたり、その友人に打ち解けた話をしたり、その友人から心配されたりした経験を想起させる「協調的資源想起条件」と、自分個人で楽しんだり、一人だけ成功したり、自信を持ったりした経験を想起させる「独立的資源想起条件」を設け、この想起を行う前と後とで協調的幸福感尺度の得点が増えるか検討した。前者の条件は、後者の条件に比べ、他者から援助されているという認識を高めるはずであり、そのことで前者は後者より協調的幸福感の上昇が大きいことがあらかじめ予想された。結果はこの仮説を支持し、協調的資源想起条件では協調的幸福感が上昇した。この補完的なデータに基づくと、もし日本等で加齢に伴ってこうした被援助感が高まるのであれば、集団主義文化における良性の加齢プロセスには、他者から援助されているという認識が加齢と共に高まることを介して、協調的幸福感を高めていた可能性が示唆されよう。

5. 地域とウェルビーイング指標

これまで紹介したように、実証的な心理学研究に基づいたウェルビーイング指標を地域のとりくみに応用しようという観点は、2023年「経済財政運営と改革の基本方針」、いわゆる「骨太の方針（第4章 中長期の経済財政運営）」にも取り上げられており（内閣府, 2023）、そこでは、「政府の各種の基本計画等における KPI（キー・パフォーマンス・インジケーター）への Well-being 指標の導入を加速 (p.36)」し、これを「地方自治体における Well-being 指標の活用を促進する (p.36)」ことで行うべきと

の明記がある。指標を活用する場合、指標のもつ特徴を理解することがその健全な運用に繋がる。では、そもそもウェルビーイング指標とは何か。

世界保健機関憲章（1948）によるウェルビーイングの正式な定義は、「個人や社会に感じられる良い状態」である。この「良い状態」は、健康の考え方の根幹を成すものであり、戦後のWHOでは健康を肉体的、精神的及び社会的に完全に良好な状態としている。これは、単に疾病又は病弱の存在しないことではないとされてもいるため、不幸せでないことのみではなく「幸せ」であることや、社会としては争いや病といった問題の無いことのみではなく「繁栄」することがその視野に入る考え方が込められている。こうした考え方は、20世紀後半より心理学にも大きな影響を与え、人間性の基礎的な心のメカニズムを検討することで人間性の負の側面や問題のメカニズムの研究のみならず、正の側面や強さのメカニズムを研究する方向へと研究の流れを誘った。例えばDiener et al. (1985)などはその先駆的な研究者であり、主観的ウェルビーイング（人生に満足し、否定的な感情よりも肯定的な感情と覚えること）や、上述した人生満足度の測定尺度を開発し、その個人差要因や社会差の実証的比較を牽引してきた。また、その共同研究者らは、文化や社会環境といった、個人を取り巻く文脈や環境がウェルビーイングに与える影響の研究を精力的に行っている（大石, 2009; Lucas, 2014; Schimmack et al., 2002; Suh et al., 1998）。さらに、こうしたウェルビーイング研究では、幸福感のメカニズムとして価値等の文化的要因との絡みがあることが指摘され（Oishi et al., 1999）、21世紀に入り、文化心理学との共同研究が一役を担うこととなった（Tov & Diener, 2007）。

ウェルビーイングの心理指標を用いて地域の違いを捉えようとした研究は、まだ萌芽的であ

る。しかし、現存するこうした研究は、日本の地域が直面するいくつかの問題に示唆のある結果を報告している。例えばLucas (2014)は、200万人の北米人を対象とした調査データに基づき、北米の郡（州の下位の行政区画）単位で、2005年から2010年に測定された人生満足感尺度の得点が平均的に高い地域ほど、2000年から2010年の間に国内からの人口流入が多く、その結果出生や死亡、海外人口流入とは別に、地域の総人口が増加したことを示している。人口流入は、人々がその地域に生活の魅力を感じたり、その地域での自らの未来に期待を持つことで生じるとすれば、人の集まる町には、個人の心理をそのように誘う地域的な文化というものもあるのかもしれない。例えばSevincer et al. (2017)は、北米の複数の町について、人々がそこへ引っ越したいと思うか調査している。その結果、多くの人々に引っ越し先として希望される町ほど、「コスモポリタン主義」という町の高特性が高いということが分かった。コスモポリタン主義が高い町とは、経済的に成功する機会があり、多様性、想像力および平等主義が尊重される町であることを指す。

この例に見られるように、実は地域の繁栄を支える事柄の中には、住民が幸福感を感じられる生活ができる町なのかといった問題があるのかもしれない。ここで、人口の増加とは、上記のような他地域からの流入のみならず、人々が「出ていかない」、すなわち定住によっても支えられて然りである。例えばOishi et al. (2007)は、居住する地域のためになる行動（向社会的行動）が、その地域の人口流入や流出が多い北米の州ほど少ないことを報告している。具体的には、地域活動を宣伝するステッカーを自分の車に貼ることや、地元密着型の店舗の売上げ、さらに勝敗に関わらず地元の野球チームを応援するために地元のスタジアムへ観戦に行くことといった、日常的で集会的な向社会的行動が、

特集 ウェルビーイングを考える

その地域の人口流動が少ないほど高い。また、この応援的観戦と定住との関係は、日本の野球チームの地域差でも再現されている (Oishi et al., 2009)。これら向社会的行動が社会関係資本、特に「互いに助け合うルール」に関わるものと捉えるならば、人口流動の少ない定住的な地域では、社会関係資本に関わりの深い種類の幸福感も高いのかもしれない。

こうした観点は特に、地方から都市部への人口流出が続き、都市部の人口過密問題に苦しむ本邦のような文脈では特別の意味を持つ。では、「定住意向（現在の町に「住み続けたい」と感じること）」は、社会関係資本に関わりの深い種類の幸福感と関連しているのだろうか。筆者は、コロナ禍の2021年初頭からコロナ禍が収束した2024年初頭の間に向け、日本人社会人計およそ3000名を対象に協調的幸福感と定住意向との関係を時系列的に検討している。具体的にこの分析では、21年の協調的幸福感が24年の定住意向を統計的に説明しうるかを検討した。結果は仮説を支持し、上記のような時系列的な関係が見られた (Hitokoto, 2024)。実は、協調的幸福感が高い人ほど、コロナ禍中に発熱などの感染症諸症状が少ないことが予め分かっており (Hitokoto & Adeclas, 2022)、このこと

を考え合わせると、コロナ禍を健康的に過ごせた者ほど、コロナ禍後に自らが住んでいた地域に定住する意向を示したことを意味している。

6. 豊中市における定住意向と協調的幸福感

では、こうした協調的幸福感と定住意向との関係は、より生活に身近な環境においても観察されるのであろうか。とよなか都市創造研究所では、2024年度に800名以上の豊中市民を対象とした「くらしの豊かさ実感に関するアンケート」を実施したが、この調査にて協調的幸福感と定住意向との関係が検討された。具体的にこの調査では、協調的幸福感尺度 (Hitokoto & Uchida, 2015) の9項目について、1（まったく当てはまらない）～5（とても当てはまる）の5段階から1つを選択させたデータと、「現在お住まいの地域」に、1（住み続けたい）～5（住み続けたくない）からの5段階から1つを選択させたデータとの対応関係を検討した。上述の他研究で観察されたことが豊中市にも押し広げられるならば、両者には比例関係が観察されて然るべきである。

結果を図1に示す。この帯グラフは、行方向

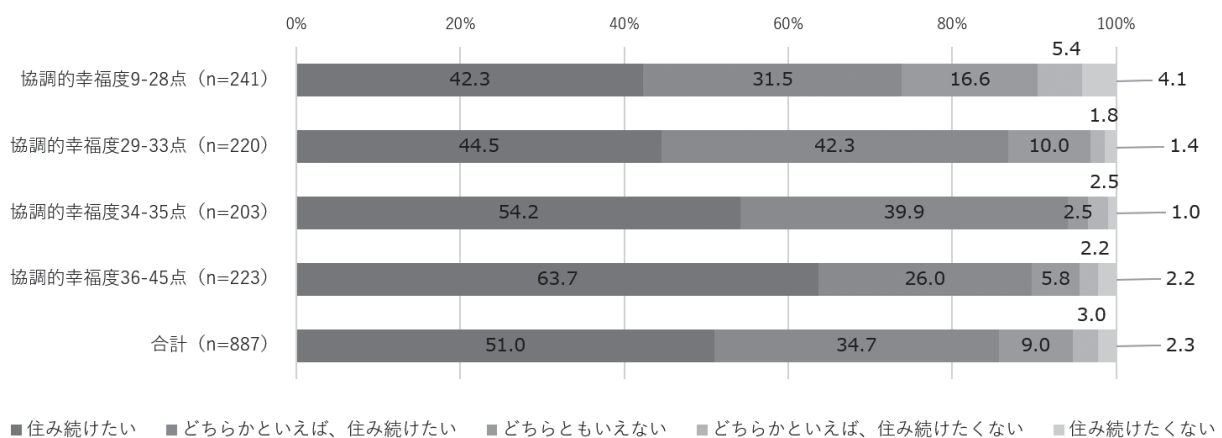


図1 協調的幸福感と定住意向との関連
(2024年度「くらしの豊かさ実感に関するアンケート」)

の帯が協調的幸福感尺度に対する評定値の9項目合計を4区分（参加者ができるだけ等しく4分割できる四分位値で分割）したものを、帯の色の濃さが定住意向の設問に対して豊中市の市民がどのように回答したのかを図示したものである。尺度の得点が高い者ほど定住意向が強いという場合、より下の帯ほど「住み続けたい」「どちらかといえば、住み続けたい」という定住意向が多く観察され、「住み続けたくない」「どちらかといえば、住み続けたくない」という、いわば移住意向が少なく観察されることになる。図1のとおり、結果は全体としてこのパターンを支持するものが得られた。なお、この分析は個人を分析単位としたものであるが、例えば、ここからさらに市内の地域単位に焦点を当てて、指標の地域差や、向地域的な行動（例：定住）と指標との関係の強弱を相対的に比較していくことで、地域単位での施策の策定や効果検証に応用することも可能であろう。

上記の結果は、ウェルビーイング指標に種類があることを踏まえ、地域の社会関係資本に関わる幸福感を指標として用いることで、地域生活の基礎に関わる人々の意識を捉えうることを示しているのかもしれない。もしそうであれば、ウェルビーイングの実証的な測定は、地域の趨勢をフォアキャスト（予測）しようとする情報を提供できる点で意義があろう。こうした実証的検討を積み重ねることで、KPIとしてのWell-being指標の導入を裏付け、地域の記述と予測、しいてはこういった地域として行きたいかといった判断へのエビデンスに基づいた指針とすることができるのではないだろうか。

引用文献

- Böll, H. (1963/2008). Anekdote zur Senkung der Arbeitsmoral (Anecdote Concerning the Lowering of Productivity; in German). In: Robert C. Conrad (Ed.), *Heinrich Böll. Cologne Edition*. Volume 12: 1959–1963.
- Cohen, D., Nisbett, R. E., Bowdle, B. F., & Schwarz, N. (1996). Insult, aggression, and the southern culture of honor: An “experimental ethnography.” *Journal of Personality and Social Psychology*, 70(5), 945–960. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.70.5.945>
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J., & Griffin, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49(1), 71–75. https://doi.org/10.1207/s15327752jpa4901_13
- 内閣府. (2023, June 26). 経済財政運営と改革の基本方針 2023. 内閣府. Retrieved December 27, 2024, from https://www.cao.go.jp/press/new_wave/20230626.html
- Hitokoto, H. (2024). Harmony and infectious symptoms -South Korea and Japan-. Presentation at The XXVI International Congress of the International Association for Cross-Cultural Psychology.
- Hitokoto H., Adeclas J. (2022). Harmony and aversion in the face of a pandemic. *Japanese Psychological Research*, 64(2), 222–243. <https://doi.org/10.1111/jpr.12416>
- Hitokoto, H., Takahashi, Y., & Kaewpijit, J. (2014). Happiness in Thailand: Variation between urban and rural regions. *Psychologia*, 57(4), 229–244.
- Hitokoto, H. and Takahashi, Y. (2021). Interdependent happiness across age in Costa Rica, Japan, and the Netherlands. *Asian Journal of Social Psychology*, 24, 445–462. <https://doi.org/10.1111/ajsp.12437>
- Hitokoto, H., & Uchida, Y. (2015). Interdependent happiness: Theoretical importance and measurement validity. *Journal of Happiness Studies: An Interdisciplinary Forum on Subjective Well-Being*, 16(1), 211–239. <https://doi.org/10.1007/s10902-014-9505-8>
- Hitokoto, H., & Uchida, Y. (2025). Increasing your interdependent happiness. In S. D. Pressman & A. C. Parks (Eds.), *More activities for teaching positive psychology: A guide for instructors* (pp. 249–259). American Psychological Association. <https://doi.org/10.1037/0000417-022>
- Hommerich, C., Ohnuma, S., Sato, K. and Mizutori, S. (2022). Determinants of Interdependent Happiness focusing on the role of social capital: Empirical insight from Japan. *Japanese Psychological Research*, 64, 205–221. <https://doi.org/10.1111/jpr.12415>
- Karasawa, M., Curhan, K. B., Markus, H. R., Kitayama, S. S., Love, G. D., Radler, B. T., & Ryff, C. D. (2011). Cultural perspectives on aging and well-being: a comparison of Japan and the United States. *International journal of aging & human development*, 73(1), 73–98. <https://doi.org/10.2190/AG.73.1.d>
- Kawachi I. (1999). Social capital and community effects on population and individual health. *Annals of the New York Academy of Sciences*, 896, 120–30. doi: 10.1111/j.1749-6632.1999.tb08110.x. PMID: 10681893.

特集 ウェルビーイングを考える

- Kitayama, S., Ishii, K., Imada, T., Takemura, K. & Ramaswamy, J. (2006). Voluntary settlement and the spirit of independence: Evidence from Japan's "northern frontier." *Journal of Personality and Social Psychology*, *91*, 369-384.
- Kobayashi, T., Suzuki, E., Noguchi, M., Kawachi, I., & Takao, S. (2015). Community-level social capital and psychological distress among the elderly in Japan: A population-based study. *PLOS ONE*, *10*(11), e0142629. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0142629>
- Lucas, R. E. (2014). Life satisfaction of U.S. counties predicts population growth. *Social psychological and personality science*, *5*(4), 383-388. <https://doi.org/10.1177/1948550613494227>
- 大石繁宏 (2009). 幸せを科学する—心理学からわかったこと. 新曜社.
- Oishi, S., Diener, E., Suh, E., & Lucas, R. E. (1999). Value as a moderator in subjective well-being. *Journal of Personality*, *67*(1), 157-184. <https://doi.org/10.1111/1467-6494.00051>
- Oishi, S., Ishii, K., & Lun, J. (2009). Residential mobility and conditionality of group identification. *Journal of Experimental Social Psychology*, *45*(4), 913-919. <https://doi.org/10.1016/j.jesp.2009.04.028>
- Oishi, S., Rothman, A. J., Snyder, M., Su, J., Zehm, K., Hertel, A. W., Gonzales, M. H., & Sherman, G. D. (2007). The socioecological model of procommunity action: The benefits of residential stability. *Journal of Personality and Social Psychology*, *93*(5), 831-844. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.93.5.831>
- Oishi, S., & Schimmack, U. (2010). Culture and well-being: A new inquiry into the psychological wealth of nations. *Perspectives on Psychological Science*, *5*(4), 463-471. <https://doi.org/10.1177/1745691610375561>
- Schimmack, U., Radhakrishnan, P., Oishi, S., Dzokoto, V., & Ahadi, S. (2002). Culture, personality, and subjective well-being: Integrating process models of life satisfaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, *82*(4), 582-593. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.82.4.582>
- Sevincer, A. T., Varnum, M. E. W., & Kitayama, S. (2017). The culture of cities: Measuring perceived cosmopolitanism. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, *48*(7), 1052-1072. <https://doi.org/10.1177/0022022117717030>
- Suh, E., Diener, E., Oishi, S., & Triandis, H. C. (1998). The shifting basis of life satisfaction judgments across cultures: Emotions versus norms. *Journal of Personality and Social Psychology*, *74*(2), 482-493. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.74.2.482>
- Talhelm, T., Zhang, X., Oishi, S., Shimin, C., Duan, D., Lan, X. & Kitayama, S. (2014). Large-scale psychological differences within China explained by rice versus wheat agriculture. *Science*, *344*, 603-608. DOI:10.1126/science.1246850
- Tov, W., & Diener, E. (2007). Culture and subjective well-being. In S. Kitayama & D. Cohen (Eds.), *Handbook of cultural psychology* (pp. 691-713). The Guilford Press.
- Uchida, Y., Takemura, K., Fukushima, S., Saizen, I., Kawamura, Y., Hitokoto, H., Koizumi, N., & Yoshikawa, S. (2019). Farming cultivates a community-level shared culture through collective activities: Examining contextual effects with multilevel analyses. *Journal of Personality and Social Psychology*, *116*(1), 1-14. <https://doi.org/10.1037/pspa0000138>